

2026 年度
【文学研究科】
入学者選抜 学力検査や試験問題の内容

〈一般選抜・社会人特例選抜〉

1) 修士課程 第Ⅰ期 試験問題

➡公表しています。社会人特例選抜の試験を実施しました。

(一般選抜出願者なし)

2) 修士課程 第Ⅱ期 試験問題

➡公表しています。一般選抜および社会人特例選抜の試験を実施しました。

3) 博士(後期)課程 試験問題

➡筆記試験を実施する選抜区分の出願者 0 名のため、公表していません。

2026（令和 8）年度
北海学園大学大学院文学研究科修士課程第Ⅰ期入学者選抜

専門筆記試験問題

2025（令和 7）年 10 月 4 日（土）10:00～12:00

事前選択した ☐1、 ☐2 歴史文化を解答しなさい。

※解答は解答用紙に記入すること。

歴史文化 1

問1 次の用語から3つ選択し、解答用紙にその番号を記した上で、200字程度で説明しなさい。ただし、3・4は日本の事例に必ずふれること。

1. 明治維新 2. 自由民権運動 3. 産業革命 4. 政党内閣（制）
5. 国家総動員法 6. 太平洋戦争 7. 北海道開拓 8. 北海道旧土人保護法

問2 次の資料を読み、設問に答えなさい。

第九ヶ条

一日本政府、外国人え当節亜墨利加人え不差免候廉相免し候節は、亜墨利加人えも同様差免し可申、右に付談判猶予不致候事

第十一ヶ条

一両国政府に於て、無抛儀有之候模様により、合衆国官吏之もの下田へ差置候儀も可有之、尤約定調印より十八ヶ月後に無之候ては不及其儀候事

1. 第九ヶ条を書き下し文にし、現代語訳しなさい。
2. 第九ヶ条の内容を端的に説明しなさい。
3. 第十一ヶ条を書き下し文にし、現代語訳しなさい。
4. のちに第十一ヶ条を根拠に来日した「合衆国官吏」を答えなさい。
5. この文書は、何と呼ばれるか、答えなさい。

歴史文化2

問1 次の文章を読み、設問に答えなさい。

問題文は著作権上の理由からウェブサイトに掲載することができませんので、下記の出典を参照するか、文学研究科事務室窓口において閲覧してください。

出典：小原こめ「夢まで悲しい」（菊池敬一・大牟羅良編『あの人は帰ってこなかった』岩波新書、1964年）

1. この話者のように戦争で夫を失った妻は、とくに何と呼ばれるか、答えなさい。
2. このような資料は、何と呼ばれるか、答えなさい。
3. 歴史研究には、なぜこのような資料が必要なのか、300字程度で論述しなさい。

問2 次の文章は、柳田国男「郷土史研究に就いての希望」（『研究評論 歴史教育』第5巻第7号臨時増刊号、歴史教育研究会、1930年9月）の抜粋である。この文章を読み、設問に答えなさい。なお、引用にあたっては、一部改変している。

今までの歴史の考え方は余りに史料を重んじ過ぎてゐたから、若し日本に戦争の史料でもないものなら、石器時代から百姓一揆に一足飛びの歴史になつてゐたかも知れないのである。史料があるために——その史料も多くは戦争とか大事件のみであつたから、我国の歴史なるものは全く英雄史に終つてゐる。

1. 文章中の「史料」とは、具体的にどのような資料か、答えなさい。
2. 問1に掲げた資料もふまえ、「史料」、さらには「史料」に依拠した近代歴史学の問題を柳田の主張に即して500字程度で論述しなさい。

解答例と出題意図

歴史文化 1 解答例

問 1

1. 明治維新

19世紀後半に日本が幕藩体制から近代天皇制へと移行する転換点となった一大変革で、世界資本主義による外圧が国内矛盾に結びつくことで江戸幕藩体制を崩壊させ、近代天皇制国家の創出と資本主義形成の起点となった政治的・経済的・社会的・文化的な一大変革を総称するという。その始期と終期には諸説あるが、ペリー来航による開国から大政奉還・王政復古の大号令、戊辰戦争、廃藩置県などを経て西南戦争までとすることが多い。

2. 自由民権運動

1874年の板垣退助らによる民撰議院設立建白書の提出に始まり、1888-92年の大同団結運動にいたる国民的政治運動で、明治政府に国会開設や憲法制定を促した。政府による藩閥政治に対して国会開設・憲法制定・地租軽減・地方自治・不平等条約撤廃という五大要求を掲げて反対した。運動は、当初の旧士族から豪農層・都市知識人・一般農民へとその主体を拡大したが、政府の厳しい弾圧や福島事件・秩父事件などによって衰退した。

3. 産業革命

紡績業と製糸業を中心とする機械制大工業の成立が都市の手工業や農村の家内工業を駆逐して資本・賃労働関係を全社会的に展開させることで、資本主義の確立を決定づけた画期的な社会変革。日本では、松方財政による紙幣整理と広範な農民の没落を前提として、1886年以後の企業勃興をもって始まり、日清・日露戦争の間に急速に進展し、織物業に力織機が導入されて家内賃織が解体されていく1910年頃に終了したとする説が有力である。

4. 政党内閣（制）

総理大臣以下のほとんどの閣僚が議会、とくに下院（衆議院）第一党の所属員によって占められる内閣。政党内閣は、第1次大隈重信内閣が最初の例で、大正期後半から昭和初期にかけて「憲政の常道」として定着した。ただし、この時期の内閣も、陸・海軍大臣は軍部大臣武官制によって政党员から選べず、外相も多くは官僚から任命していたため、完全な政党内閣とはいえなかった。政党内閣は1932年の五・一五事件によって終焉を迎えた。

5. 国家総動員法

日中戦争開始の翌年にあたる1938年に近衛文麿内閣のもとで制定された法律。政府が戦時・事変に際し、国防目的達成のために人的・物的資源を統制・運用できるよう政府に広汎な権限を与えた委任立法で、戦時統制経済の基盤となった。この法律により、帝国議会の承認を経ずに勅令で物資配給や価格統制、言論統制、労働条件の規制・労働争議の禁止、労働力動員などを行うことが可能となり、国民生活や経済活動は著しく制限された。

6. 太平洋戦争

1941年12月8日の日本の真珠湾攻撃と米英への宣戦布告に始まり、45年8月15日の「玉音放送」を経て9月2日の降伏文書調印によって終わった戦争。第2次世界大戦の一部を構成するとともに、日本にとっては満洲事変（1931年）以降の中国侵略の延長であった。1945年の東京大空襲などの無差別爆撃、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾投下などによって民間人にも多くの犠牲者が出た。満洲事変以来の戦没者は軍民あわせ約310万人といわれる。

7. 北海道開拓

明治初期から大正期にかけて、政府や本州資本が北海道に巨額の財政投資を行い、本州から多数の移住民を送り込むとともに、農耕地を拡大し、鉱・水・林産資源の開発を強力に推進した社会現象をさす。その中心となったのは開拓使と北海道庁で、前者による10年計画（1872-81年）や後者による北海道10年計画（1901-09年）などは、政府の継続的な財政支出のもとで開拓のための基礎的な諸事業を推進しようとしたものであった。

8. 北海道旧土人保護法

近世以来の経済的収奪や開拓使による狩猟の禁止などによって生活が困窮していたアイヌを「保護」の名の下に「日本人」化しつつ、社会から排除しようとする二重の差別構造をもった同化政策のための法律で、1899年に制定された。土地給与や営農助成などを通じて開拓農民化を図り、同化を推進する一方、旧土人小学校の設置によって分離・差別的教育を行った。その廃止は、1997年のアイヌ文化振興法の制定を待たなければならなかった。

問2

1. 〔書き下し文〕

一日本政府、外国人え当節亜墨利加人え差し免さす候廉相免し候節は、亜墨利加えも同様差し免し申すへし、右に付、談判猶予致さす候事

〔現代語訳〕

日本政府が外国人に対し、現在アメリカ人に許可していないことを許す場合には、アメリカ人にも同様に許可しなくてはならない。このことについては談判に時間をかけない。

2. 日本がアメリカに対して片務的最恵国待遇を与えたもので、不平等な内容である。

3. 〔書き下し文〕

一両国政府に於いて扨無き儀これ有り候模様により、合衆国官吏のもの下田に差し置き候儀もこれ有るへし、尤も約定調印より十八ヶ月後にこれ無く候ては、其の儀に及はす候事

〔現代語訳〕

両国政府において、やむを得ない事情が生じた時には、状況によって合衆国官吏の者を下田に駐在させることもある。もっとも、条約調印から18カ月後のことでなくてはならない。

4. (タウンゼント) ハリス

5. 日米和親条約

出題意図

問1では、受験生が北海道において日本近代史を学ぶことにどれほど自覚的であるかに留意しつつ、日本近代史に関する基礎的な知識を問いました。また、問2では、問1と同じ知識に加え、候文の読解力を問いました。

設問は、文学研究科のアドミッション・ポリシーのうち、「大学院文学研究科で学ぶことに耐える学力・知力が充実している人」を前提条件として、さらに一般選抜が対象とする「学部における勉学をふまえ、さらに自らの世界を切り拓き、自己の確立を目指す人」をも視野に入れ、出題したものです。

歴史文化² 解答例

問1

1. 寡婦、(戦争) 未亡人

2. オーラルヒストリー(ライフヒストリー、聞き書き)

3. 記録(文字資料)は、それが指し示す事実が記録するに足る「価値」あるものと判断されたとき、残される。したがって、この話者のように「本当に早いそしてつまらない一生を送っていく」との自覚のある者は自らの足跡を記録に残さない。とくに差別にさらされている人々は、そのいわれを社会と共有・内面化している時点では、自らの消息を隠そうとする(逆に差別が不当だと認識すれば、自らの足跡を積極的に記録に残す)。したがって、こうした人々に自らの体験を口述してもらい、それを記録し、分析すること——「記憶」の歴史化は、マイノリティや被支配者、被害者の歴史、差別の歴史を認識し、叙述するうえで欠くことのできない取り組みである。

問2

1. 文献資料(文字資料)

2. 柳田の主張の根拠には、第一に識字能力は時代を遡れば遡るほど権力者に独占されていたこと、第二に人は普段繰り返している日常生活については記録を残さない傾向があること、第三に文書や記録が「生きた証」とすれば、問1で掲げた資料にみるように、民衆には自らの生活がそのような「価値」のあるものとは認識されなかったことが挙げられる。したがって、歴史は、文献資料に依拠する限り、非日常の歴史・事件史にならざるをえない。

ただし、資料と認識・叙述されるものとしての歴史の関係は、柳田の指摘とはむしろ逆である。実際には、歴史家が「戦争」や「大事件」、要するに政治史や国家史、大人物の伝記的研究にもっぱら関心を寄せていたからこそ、公文書をはじめとする文献資料が重視されたのである。

そもそも資料とは、歴史家に「資料」とみなされてはじめて資料となる。いわば、日本民俗学やアナール学派などの「新しい歴史学」は、民衆の歴史・日常の歴史を明らかにするために、それまで近代歴史学が資料とみなしていなかった非文字資料を「資料化」したのである。この意味で、新しい歴史学は、歴史をどのようなものとして認識するかという、近代歴史学の歴史観そのものを問い質したといえるであろう。

出題意図

問1では、オーラルヒストリーに関する知識を問いました。また、問2では、問1の問題をさらに史学史の問題に敷衍し、自らが専門と志す歴史学の方法論について、どの程度自覚的かを問うたつもりです。

設問は、文学研究科のアドミッション・ポリシーのうち、「大学院文学研究科で学ぶことに耐える学力・知力が充実している人」を前提条件として、さらに社会人特例選抜が対象とする「社会人として多様な経験を積み、自らの経験をふまえた課題を胸に、新しい学問の地平を切り拓き、自己の確立を目指す人」をも視野に入れ、出題したものです。

1 言語文化(文学)

問一、次の用語の中から四つを選択し、その番号を文頭に記入したうえで、具体的に説明しなさい。

- | | | | |
|--------|-------|--------|-----------|
| ① 蜻蛉日記 | ② 弘徽殿 | ③ 紫明抄 | ④ 続古今和歌集 |
| ⑤ 直衣 | ⑥ 引歌 | ⑦ 本歌取り | ⑧ 物語二百番歌合 |

問二、次の和歌はいずれも、『百人一首』に採られている和歌である。歌に用いられている修辞を指摘したうえで、現代語訳しなさい。

- ① 立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かばいま帰り来む『古今和歌集』離別・三六五・題しらず・在原行平朝臣)
- ② 住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ『古今和歌集』恋二・五五九・寛平御時後の宮の歌合の歌・藤原敏行朝臣)

出典：小沢正夫・松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』小学館、一九九四年。ただし一部変更した。

2 言語文化(文学)

次の文章は、源氏が女君たちに装束を見立てる場面である。これを読み、後の設問に答えなさい。

ここかしこの擣殿より参らせたる擣物ども御覧じくらべて、濃き赤きなど、さまざまを選らせたまひつつ、御衣櫃、衣箱どもに入れさせたまうて、大人びたる上臈どもさぶらひて、これはかれはと取り具しつゝ入る。上注も見たまひて、「いづれも、劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着たまはん人の御容貌に思ひよそへつつ奉れたまへかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」とのたまへば、大臣うち笑ひて、「つれなくて、人の御容貌推しはからむの御心なめりな。さて、いづれをとか思す」と聞こえたまへば、「それも鏡にてはいかでか」と、さすがに恥ぢらひておはす。紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの御料、桜の細長に、艶やかなる搔練とり添へては姫君注の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方注に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対注に奉れたまふを、上は見ぬやうにて思しあはす。内大臣のはなやかにあなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに似たるなめりと、げに推しはからるるを、色には出だしたまはねど、殿見やりたまへるに、ただならず。「いで、この容貌の上そへは、人腹立ちぬべきことなり。よきとても物の色は限りあり、人の容貌は、後れたるも、また、なほ底ひあるものを」とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほは笑まれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きが艶やかなる重ね

て、明石の御方に、思ひやり気高きを、²上はめざましと見たまふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にあるくちなし梔子の御衣、ゆるしいろ聴色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに似ついたる見むの御心なりけり。

出典『源氏物語』玉鬘卷(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳)新編日本古典文学全集22 源氏物語③『小学館、一九九六年』。ただし一部変更した。

注 上：紫の上。

注 姫君：明石の君が産んだ明石の姫君。

注 夏の御方：花散里。

注 西の対：玉鬘。

問一、傍線部1を現代語訳しなさい。

問二、傍線部2「上はめざましと見たまふ」について、その理由を述べたうえで解釈しなさい。

問三、装束を見立てられた女君たちの中から二人を選び、装束から想像される女君の人物像についてそれぞれ述べなさい。

問四、『源氏物語』がそれ以降の物語に与えた影響について、具体例を挙げて論じなさい。

大学院入学者選抜の解答例と出題意図

1 言語文化(文学)

問一(解答例)

① 蜻蛉日記

作者は歌人としても有名な藤原道綱母。父は受領の藤原倫寧で、天曆八年(九四五)に、のちの関白である藤原兼家と結婚し、道綱を生んだ。全三巻で、兼家との結婚生活を軸に、作者の二十一年間の人生を綴る。上巻では満たされない結婚生活の話題が主であり、中巻では道綱の成長や、兼家との関係が途絶えがちな中での石山寺参籠などが描かれる。下巻では、道綱の恋愛や養女の縁談に関する話題が多く、ある種の諦めにたどりついている。自らとその人生を観照するという視点を獲得し、『源氏物語』をはじめ、以降のいわゆる女流文学に大きな影響を与えた。

② 弘徽殿

平安時代の内裏の後宮の殿舎の一つ。清涼殿の北にあり、南北七間、東西二間、中央に馬道が通る。その四面に庇をめぐらし、東側に孫庇があり、東側から北側にかけて簀子縁があった。飛香舎とともに皇后、中宮、または最上席の女御の御所とされた。『源氏物語』の花宴巻では、光源氏が紫宸殿の桜の宴の夜、細殿(西庇)で朧月夜という女君と出会う。『源氏物語』では、桐壺帝の女御として朱雀院を生んだ弘徽殿女御が有名である。

③ 紫明抄

鎌倉時代、源光行の子の素寂によって編まれ、永仁元年(一二九三)ごろに完成した、河内方による『源氏物語』の古注釈。永仁元年から二年にかけて、鎌倉幕府第八代將軍久明親王に献上するために編まれたと考えられる。河内本系の本文を持ち、先行する注釈書である『源氏釈』『奥入』そして特に鎌倉で成立したと考えられる『光源氏物語抄』の注釈を取り入れ、また和漢のさまざまな文献を典拠として示し、引歌や故事出典を指摘している。

④ 続古今和歌集

十一番目の勅撰和歌集。二〇巻、一九一五首。下命者は後嵯峨院で、撰者は藤原基家・衣笠家良・九条行家・藤原為家・葉室光俊(真観)の五人である。文永二年(一二六五)成立。部立ては春(上・下)・夏・秋(上・下)・冬・神祇・釈教・離別・羈旅・恋(一・五)・哀傷・雑(上・中・下)・賀。撰者は最初は為家だけであったが、途中から加わった光俊は宗尊親王の和歌師範という権威を背景に発言力が強かった。代表歌人は入集歌数順に、宗尊親王・西園寺実氏・定家・後嵯峨院・後鳥羽院・為家・家隆など。

⑤ 直衣

平安時代以来の公卿の日常服。位階による色の制限がない。三位以上の者が勅許を得ると、着用して参内できた。色目・文様は初め一定していなかったが、勅許であったため、次第に形式化した。冬は表を白の綾、裏の色は二藍。若年は紅を深く染め、年齢を加えるにつれて藍を深くして紅を淡くし、綾のちに平絹を用いた。直衣を着用するときの装束は、立烏帽子または冠・直衣・相また

は単・当帯・指貫・下袴・檜扇・浅沓である。

⑥ 引歌

歌学用語。和歌を文章や会話の中に引用する表現方法。また引用された和歌も指す。ふつう、一句二句程度を引用することで、引用されていない部分、特にその心情表現を連想させることが多い。『蜻蛉日記』にも見られる。『源氏物語』には多様な引歌が見られ、表現内容に深みを与えている。引用されるのは、有名な和歌が多いが、たとえば同時代に成立したあまり知られていない歌が引用される場合もある。

⑦ 本歌取り

有名な和歌の表現を意識的に取り入れて、作品世界の奥行きを増し、新しい和歌を詠む技法。取り入れる和歌を本歌という。藤原俊成や定家ら新古今時代の歌人たちのころ、最も隆盛した。定家の歌論書『詠歌大概』によれば、時代の近い歌人の歌は取らない、取り入れる和歌の言葉は、二句に加えて三、四字以下にする、主題を変えることが条件とされている。本歌を踏まえて鑑賞することが要求されている場合に、本歌取りの技法が用いられていると考えられる。

⑧ 物語二百番歌合

藤原定家の撰で、『百番歌合』と『後百番歌合』を併せて『物語二百番歌合』と呼称する。元久三年（一二〇六）年頃の成立。『百番歌合』は、『源氏物語』の和歌一〇〇首を左方に、『狭衣物語』の和歌一〇〇首を右方に配し、計二〇〇首に詞書と詠者名を付す。『後百番歌合』は『拾遺百番歌合』ともいい、『源氏物語』歌一〇〇首を左方に、『夜半の寝覚』二〇首・『浜松中納言物語』一五首・『みかはにさける』一五首・『朝倉』二三首・『左も右も袖ぬらす』一〇首・『心高き』一〇首・『古とりかばや』六首・『露の宿り』五首・『末葉の露三首』・『海人の刈藻』三首の物語の歌を右方に配し、計二〇〇首に詞書と詠者名を付す。

問二(解答例)

①「往なば」と「因幡」、「待つ」と「松」が掛詞になっている。

あなたと別れて因幡に行ってしまったも、因幡国の因幡山の峰に生える松の名のように、私を待つと聞けば、すぐにでも帰ってきましよう。

②「住の江の岸に寄る波」は音によって「よる」を導く序詞。

住の江の岸に寄せる波の「よる」ではないが、「夜」の夢の中の通い路でさえも、あなたは人目を避けるのだろうか。

※出題意図と入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)との関わり

大学院文学研究科では、日本文化について、とくに4つの分野から歴史的背景を踏まえて明日の豊かな文化創造を主体的に担いよう人間の養成を目指している。試験問題の作成に当たっては、本研究科が求める「大学院生像」にふさわしい入学者、すなわち本研究科で学ぶことに耐える学力・知力が充実にあり、新しい学問の地平を切り拓き、自己の確立を目指すことのできる人を選抜することを目標としている。

2 言語文化(文学)

問一(解答例)

いずれも劣っている優っているという区別もつけられないものばかりですが、お召しになる方のお顔に似合うように見立てておあげなさいませ。

問二(解答例)

源氏が、梅の折枝に蝶や鳥が飛びちがつている模様の、唐風の白い小桂に、濃い紫の艶のあるのを重ねたものを明石の君にご用意になった。源氏が明石の君に選んだ装束から、明石の君の気品の高い人柄が思いやられ、源氏が明石の君をどのように心に留めているかを読み取りつた紫の上は、それが気に入らないと、嫉妬心を抱いてご覧になる。

問三(解答例)

花散里

薄い藍色の、海辺の景色を描いた織物の、織りざまは優美だが目立たない表着に、たいそう濃い紅の搔練の下襲をそろえていることから、上品かつ目立たない、控えめな人柄を表している。

玉鬘

曇りなく真つ赤な表着に山吹の花模様のある細長は、はなやかできれいな玉鬘の若々しい魅力を表している。

問四(解答例)

鎌倉時代、後嵯峨院の晩年に当たる文永八年(一一七一)に撰ばれた物語歌集『風葉和歌集』に和歌が入集していることから、『石清水物語』はいわゆる後嵯峨院時代(在位一一四三～四六、院政一二四六～七二)に成立したとされる。

『石清水物語』の姫君には『源氏物語』玉鬘や『夜の寝覚』の女君などの影響が指摘され、秋の大將についても、『源氏物語』の光源氏や勾宮の影響が指摘されている。これらと同様に、主人公にして武士である伊予守を描くに際しても、『源氏物語』の柏木をはじめ、造型上影響を受けた物語中の人物は複数指摘されている。そのうえで、場面描写及び人物造型における表現の一致・類似から検証するところ、伊予守と姫君の関係は、光源氏と藤壺の関係を踏まえて描かれており、光源氏と藤壺の関係性は、個々の人物像における典拠以上に、より重要で根幹的なモデルである。

伊予守と姫君の物語は、光源氏と藤壺の物語から、親としての葛藤やお互い以外の他者の存在を切り捨て、思い合いながらも身分差ゆえ結ばれ得ない男女の悲恋という要素に焦点を絞っていることが読み取れる。『石清水物語』は、結局のところ、一人の男君と一人の女君の間で完結する悲恋を、わかりやすく描く恋愛小説なのである。そして、この主題は、『源氏物語』の展開や人物造型、印象的な場面や表現までもある程度諳んじていないと読み取れない。

つまり、『石清水物語』は『源氏物語』に関する知識教養を共有しない読者を想定していないと考えられるのである。現代人は、『源氏物語』の引用に、王朝時代への憧憬と創造力の欠如のみを

認めてしまいがちである。しかし、作者と読者の間に共有された知識教養を踏まえて読むと、思いの外自由で豊かな創作への取り組みが見られる。事実から離れ、描きたいものを描き物語世界を創造できる作り物語の魅力が存分に発揮されている。

※出題意図と入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)との関わり

大学院文学研究科では、日本文化について、とくに4つの分野から歴史的背景を踏まえて明日の豊かな文化創造を主体的に担いうる人間の養成を目指している。試験問題の作成に当たっては、本研究科が求める「大学院生像」にふさわしい入学者、すなわち本研究科で学ぶことに耐える学力・知力が充実しており、新しい学問の地平を切り拓き、自己の確立を目指すことのできる人を選抜することを目標としている。

2026（令和 8）年度
北海学園大学大学院文学研究科
修士課程第Ⅱ期入学者選抜

専門筆記試験

専攻：英米文化、専攻分野：言語文化（文学）

2026 年 2 月 14 日（土）10:00-12:00

英米文化専攻の言語文化（文学）に関する設問 1、2、3に解答し
なさい。解答は解答用紙に記入すること。

英米文化専攻の言語文化（文学）に関する設問

1 19世紀半ばに興隆した **Condition of England novels**（イングランドの状況小説）について説明しなさい。またヴィクトリア朝のイングランド小説の中から複数の作品を挙げ、どのような点が **condition of England** なのかを説明しなさい。作家名・作品名は英語で書くこと。

2 **intertextuality**（間テクスト性）について説明しなさい。またイギリス小説（時代は問わない）の中から一編取り上げ、**intertextuality** がどのように作品に組み込まれているかを説明しなさい。作家名・作品名は英語で書くこと。

3 次の英文（小説の一節）を読み、登場人物と語り手の **irony**（皮肉）がどのように表現されているかを説明しなさい。

著作権の関係により公開していません

2026（令和 8）年度 北海学園大学大学院文学研究科
修士課程第Ⅱ期入学者選抜

専門筆記試験

出題意図と解答例

専攻：英米文化、専攻分野：言語文化（文学）

1

出題意図：英文学史の知識を問うことを意図した。

解答例：19 世紀半ばに興隆した Condition of England novels とは、当時のイングランドの状況を描いた社会小説を指し、その思想的根幹は社会的分断を危惧した Thomas Carlyle の議論に由来する。Condition of England を描いたヴィクトリア朝のイングランド小説として、Charles Dickens の *Oliver Twist* や Elizabeth Gaskell の *Mary Barton* などが挙げられる。前者では、新救貧法の施行にともなう救貧院の環境悪化が主人公 Oliver の救貧院生活の描写を通して批判されており、後者では、イングランド北部のマンチェスターを舞台に当時の経営者と労働者の対立・格差が克明に描かれ、両者の対立が共感によって超克されている。

2

出題意図：文学用語の知識を問うことを意図した。

解答例：intertextuality とは、あるテキストが別のテキストと関連する状態を指す。この用語を造語した Julia Kristeva によれば、どのようなテキストも他のテキストから自由にはなれないという。intertextuality は借用という形で発現するケースが多い。一例を挙げれば、現代の移民文学として名高い Zadie Smith の小説 *White Teeth* では数多くの先行作品への allusion（引喩）が見られる。たとえば、20 世紀後半のイングランドの学校教育を批判的に見ている人物 Samad の視点に立って語り手は、18 世紀の詩人 Alexander Pope の *An Essay on Criticism* の名言 “A little learning is a dang’rous thing” をもじって、“A little English education can be a dangerous thing.” と述べ、あえて伝統的な英文学作品への引喩という形をとることで、イングランドの学校教育への皮肉な視線を表現している。

3

出題意図：英語小説を原文で読み、文学的表現（irony）を理解し、その仕掛けについて考察する力があるかどうかをはかることを意図した。

解答例：英文では、登場人物による皮肉と語り手による皮肉が表現されている。Biswas は新聞社への反発として会社をずる休みしようとするのだが、あえて勤務先を挑発するために、息子 Anand に「仕事に行きたい気分ではない」という挑発的な欠勤理由を電話で伝えさせようとする。Anand に電話をしたくないと反論されると、Biswas は「世の中は好きなことばかりできるわけではない」と人生訓を垂れることで応酬するが、今度は Anand に、好きなことばかりできるわけではないのなら、仕事に行きたくないなんていう欠勤理由がまかり通るのか（「なのに、今日は仕事に行きたくありませんって僕に言わせるんだ」と皮肉たっぷりの返しをされる。しかも「クビにしてもらいたいくらいだ」と氣勢をあげる Biswas は、妻 Shama からその言葉をおうむ返しされることで、今度は妻からも、またいつもの氣勢ね、とでも言うような皮肉を投げかけられる。最後は、欠勤日の間隔を慎重にあけるようにした、いう語り手の言葉から、小心者の Biswas に対する語り手の皮肉までもが読みとれる。

2026 年度 北海学園大学大学院文学研究科修士課程 第II期入学試験
専門試験（言語学・言語教育学）

2026 年 2 月 14 日（土） 10:00-12:00

《注意》 解答は解答用紙に記入のこと。

問.

次の A-F から任意の 2 題を選び、選んだ問題のそれぞれについて、自分の研究予定との関わりを含めて、示されたキーワードの全てを用いて論述しなさい（各 300-600 字程度）。解答用紙には、選んだ問題の記号（A-F）を記載すること。

- A. 外国語の文法指導（キーワード：文法規則，明示的指導，指導のタイミング）
- B. 外国語の語彙指導（キーワード：語彙知識，定型表現，意図的学習，偶発的学習）
- C. 外国語の発音指導（キーワード：ネイティブ・スピーカー，明瞭性，理解性）
- D. 外国語指導の訂正フィードバック（キーワード：直接訂正，間接訂正，焦点化，包括的）
- E. タスクベースの外国語指導（キーワード：タスク，フォーカス・オン・フォーム，PPP）
- F. 外国語学習者の個人差（キーワード：動機づけ，学習方略，学習スタイル）

2026 年度 北海学園大学大学院文学研究科修士課程 第Ⅱ期入学試験
専門試験（言語学・言語教育学）出題意図と解答例

1. 出題意図

本試験の出題意図は下記の三点に集約され、理論理解・研究計画・論述力を統合できるかを測る総合的問題である。

(1) 第二言語教育に関する基礎理論の理解の確認

文法・語彙・発音・フィードバック・タスク・個人差という主要領域について、提示されたキーワードを用いて説明できるかを通して、応用言語学・外国語教育学の基礎知識の体系的理解を測る。

(2) 理論と自身の研究計画を結び付ける力の評価

単なる概念説明ではなく、「自分の研究予定との関わり」を述べるさせることで、研究テーマの位置づけ、研究目的の妥当性、理論的背景の統合力など、大学院修士課程に必要な研究志向性を確認する。

(3) 学術的論述力の測定

300-600 字という制限内で、キーワードを漏れなく使用する構成的論理的で簡潔な文章表現、概念の説明から課題提示、研究接続という学術的展開ができるかを評価する。

2. 模範解答例

* 研究計画との関連については、個々の受験者により解答が異なるため、省略する。

A. 外国語の文法指導（キーワード：文法規則，明示的指導，指導のタイミング）

外国語の文法指導においては、学習者が言語形式を体系的に理解し、運用へと結び付けられるよう、明確な**文法規則**の提示と意味理解の統合が求められる。特に、教師が規則を言語化して説明する**明示的指導**は、分析的学習傾向をもつ日本人学習者にとって有効であり、誤用の抑制や気づきの促進に寄与することが指摘されている。一方で、文法説明を活動前に行うか、活動後の振り返りとして行うかという**指導のタイミング**は、理解の深さや自動化の程度に影響を及ぼす可能性がある。意味中心活動と形式への注意喚起をどのように往還させるかが重要な課題である。私の研究予定では、（以下省略）。

B. 外国語の語彙指導（キーワード：語彙知識，定型表現，意図的学習，偶発的学習）

外国語の語彙指導では、語の意味理解にとどまらず、形態・統語・語用的用法を含む多面的な**語彙知識**の形成が不可欠である。とりわけ実際のコミュニケーションで高頻度に用いられる**定型表現**は、流暢さや語用的適切性の基盤となるため、体系的な指導対象として重視される必要がある。語彙習得には、語形や意味を意識的に学ぶ**意図的学習**と、読解・聴解などの言語使用を通して自然に獲得される**偶発的学習**の双方が関与し、両者の相補的關係を踏

まえた指導設計が求められる。私の研究では、(以下省略)。

C. 外国語の発音指導 (キーワード: ネイティブ・スピーカー, 明瞭性, 理解性)

外国語の発音指導は従来、ネイティブ・スピーカーの発音への接近を理想としてきたが、国際共通語としての英語使用の拡大に伴い、近年では聞き手に正確に伝わる**明瞭性**と**理解性**が中心的目標として再評価されている。すなわち、母語話者の完全性よりも、相互理解を可能にする発音能力の育成が教育的妥当性をもつと考えられる。この視点は、学習者の発音不安の軽減や学習持続性の向上にも関係すると示唆される。私の研究予定では、(以下省略)。

D. 外国語指導の訂正フィードバック (キーワード: 直接訂正, 間接訂正, 焦点化, 包括的)

学習者の誤りに対する訂正フィードバックは、第二言語発達を促進する重要な指導要素である。教師が正しい形式を提示する**直接訂正**は即時的理解を助ける一方、誤りの所在のみを示す**間接訂正**は学習者の内省や自己修正を促す点で有効とされる。また、特定の言語形式に限定して行う**焦点化**フィードバックは習得効果を高めやすいが、教室では多様な誤りに対応する**包括的**フィードバックとの均衡が課題となる。どの方法が長期的習得や転移可能性に寄与するかについては、依然として検討の余地がある。私の研究では、(以下省略)。

E. タスクベースの外国語指導 (キーワード: タスク, フォーカス・オン・フォーム, PPP)

タスクベースの外国語指導は、意味交渉を伴う活動を通して実際の言語運用能力を育成する教授法として発展してきた。その過程で、コミュニケーション中に言語形式へ注意を向けさせる**フォーカス・オン・フォーム**は、流暢さと正確さの統合に寄与する重要な概念とされる。一方、従来の**PPP** (提示・練習・産出) 型指導は形式習得の体系性を備えるが、実際の使用場面との乖離が課題として指摘されてきた。両者の利点をどのように統合するかが現代的テーマである。私の研究予定では、(以下省略)。

F. 外国語学習者の個人差 (キーワード: 動機づけ, 学習方略, 学習スタイル)

外国語学習の成果は、教育条件のみならず、学習者の**動機づけ**、使用する**学習方略**、情報処理傾向としての**学習スタイル**など、多様な個人差要因に大きく影響される。特に内発的動機づけは学習継続と深い処理を支え、方略使用は語彙保持や理解促進と密接に関わるとされる。一方で、学習スタイル概念の教育的有効性については再検討も進んでおり、複合的視点からの検証が必要である。私の研究では、(以下省略)。

2026 年度 北海学園大学大学院文学研究科修士課程第 II 期入学試験
(英語)

2026 年 2 月 14 日 (土) 10:00-12:00

次の英文を読んで下の設問に答えなさい。

Language is far more than a neutral instrument for communication. It is a central mechanism through which knowledge, identity, and social belonging are produced and sustained. Nowadays, multilingualism is increasingly being recognized as a foundational condition for inclusive education systems, democracies, and peaceful societies. This recognition was prominently reaffirmed during the 2021 International Mother Language Day. During this event, United Nations Member States emphasized linguistic diversity as both a human right and a strategic resource for sustainable development. The event highlighted the idea that no meaningful vision of social inclusion and progress can exist without respect for the languages through which individuals and communities interpret the world.

None of this is easy work, as multiple ① natural and social forces combine to (ア) exacerbate language shift, or language death. The Covid-19 pandemic, for example, exposed deep inequalities in access to education, with linguistic minorities often facing disproportionate barriers to remote learning and public health information. A more long-standing social mechanism exacerbating language death is linguistic imperialism. This concept refers to powerful languages—most notably English today—spreading and dominating not just by accident, but through historical forces such as colonialism, globalization, education systems, technology and media. ② Dominant languages gain prestige largely because of their close association with economic processes and the production of wealth. In the process, local and minority languages can be pushed aside, losing not only status but speakers.

Despite efforts to protect and promote endangered languages, the global linguistic landscape remains deeply fragile. Of the more than eight thousand documented languages worldwide today, only about seven thousand are still actively used, and fewer than fifteen hundred enjoy formal legal recognition. Approximately fifteen hundred languages are at immediate risk of losing their remaining speakers, often as a result of urbanization, educational (イ) assimilation, and economic pressures. About half of today's eight thousand documented languages may disappear by 2100. More pessimistic projections suggest that up to ninety percent could eventually die out. Despite considerable population growth during the past century, linguistic diversity has actually dropped dramatically. In other words, as the Earth becomes over-populated, cultural and linguistic (ウ) homogenization around the world is becoming increasingly evident.

In her address at the 2021 International Mother Language Day celebration, UNESCO Director-General Audrey Azoulay drew attention to a pressing challenge in the digital age. While digital technologies promise unprecedented access to information, the overwhelming majority of the world's languages remain excluded from online spaces. Approximately ninety-eight percent of languages today have little or no presence on the Internet. This creates a form of digital

(エ) marginalization that mirrors older patterns of cultural exclusion. The vitality of languages, Azoulay argues, depends not only on their transmission through formal education but also on their use in everyday life, including digital communication, media, and cultural production.

The death of languages both leads to and worsens social inequality, because access to education, academic publishing, and global influence often depends on use of dominant languages. The erosion of linguistic diversity has profound consequences, particularly for Indigenous Peoples whose languages are closely tied to land, spirituality, and collective memory. In light of these growing pressures, multilingual education is increasingly being understood as a critical component of crisis response and recovery. Ensuring that educational resources are accessible in multiple languages is now understood as an ethical obligation aligned with the humanist principle of (オ) emancipation for all.

To curb language death, UNESCO has launched several initiatives aimed at expanding multilingual digital content. Among these, the “Translate a Story” project stands out as a practical response to linguistic exclusion, which was exacerbated during the Covid-19 pandemic. Through this initiative, thousands of children’s books have been translated into more than one hundred languages, including many that are rarely represented in global publishing markets. By enriching the Global Digital Library with diverse linguistic materials, the project seeks to democratize access to cultural knowledge while validating the cultural experiences of marginalized language communities. Special attention is given to Indigenous languages, which represent a significant portion of the world’s linguistic diversity, and most of the world’s endangered languages.

Beyond its cultural significance, multilingualism is closely linked to broader processes of knowledge production and social transformation. UNESCO has consistently emphasized that information and knowledge are crucial to economic development and human well-being. Language mediates access to these resources by conditioning how knowledge is created, shared, and evaluated within specific sociocultural and political contexts. When certain languages dominate public and digital spheres, alternative perspectives risk being silenced. This can lead to epistemic inequality, or unequal power and access in the production, validation, and circulation of knowledge. Multilingualism therefore becomes essential for maintaining a pluralistic global knowledge ecosystem, and by extension, a more equal society.

From a human rights perspective, the right to express oneself in a language of one’s choice is firmly embedded in international legal frameworks. The Universal Declaration of Human Rights, for example, affirms freedom of expression without linguistic discrimination. It extends this principle to both physical and digital public domains. The 2003 UNESCO Recommendation Concerning the Promotion and Use of Multilingualism and Access to Cyberspace further articulates these rights within the context of emerging information technologies. This Recommendation remains a unique (カ) normative instrument addressing linguistic equity in cyberspace. It will surely gain greater importance, as society is unfortunately turning its attention to artificial intelligence as providing technical solutions to social problems.

The 2003 Recommendation calls upon governments, international organizations, civil

society, academic institutions, and private sector actors to collaborate in expanding multilingual digital content and infrastructure. It encourages the development of public domain resources, equitable access to networks, and balanced approaches to intellectual property that respect both copyrights and broader public interest. Importantly, the Recommendation recognizes that technological innovation alone cannot guarantee inclusion unless it is guided by clear ethical and policy commitments to linguistic diversity. While international frameworks and technological innovations offer valuable tools, their effectiveness ultimately depends on political will, collective responsibility, and a clear understanding of the differences between social and technological realities.

Protecting linguistic diversity is not an act of nostalgia, nor is it simply about preserving words and grammar systems. It is about supporting the technological, social, and economic conditions that allow languages to thrive rather than die. Education systems, media environments, and digital platforms all play critical roles in this complex and long-term project. Multilingualism, in this sense, occupies a central position in contemporary efforts to build inclusive, resilient, democratic, and peaceful societies.

出典：UNESCO (2021) “Linguistic diversity is a mirror of cultural richness and imperative for inclusivity in education and society” より一部抜粋・改変。

Source: <https://www.unesco.org/en/articles/linguistic-diversity-mirror-cultural-richness-and-imperative-inclusivity-education-and-society>

設問

問1 下線部(ア)～(カ)の語について、本文中の語義として最も適切なものを下記より選び、記号で答えなさい。

- (a) the process of becoming more uniform or similar
- (b) the production and exchange of knowledge
- (c) establishing norms, standards, or rules (often in legal or policy contexts)
- (d) to make a problem or situation worse
- (e) warm, sometimes sad feeling of longing for the past
- (f) the process by which minority groups adopt the dominant culture or language
- (g) being freed from control, restrictions, or unfair limits
- (h) the exclusion of groups from full participation in society

問2 下線部①を含む段落を見て、言及されている「自然的要因」と「社会的要因」をそれぞれ答えなさい。

問3 下線部②を日本語に訳しなさい。冒頭の In the process が指す内容を明示して訳すこと。

問4 本文の内容を踏まえて、多言語主義とは何か、またそれが言語の消滅をどのように抑えるのかについて、自分の言葉で説明しなさい。

- 問 5 現在のデジタル技術のあり方や、インターネットがどのように構築・利用されているかによって、言語的不平等がどのように悪化しているのかについて、筆者の主張を自分の言葉で要約しなさい。
- 問 6 2003 年の UNESCO Recommendation Concerning the Promotion and Use of Multilingualism and Access to Cyberspace の内容と目的について、自分の言葉で要約しなさい。

大学院入学者選抜の解答例と 出題意図

問1 下線部(ア)～(カ)の語について、本文中の語義として最も適切なものを下記より選び、記号で答えなさい。

- (ア) *exacerbate*: (d) to make a problem or situation worse
- (イ) *assimilation*: (f) the process by which minority groups adopt the dominant culture or language
- (ウ) *homogenization*: (a) the process of becoming more uniform or similar
- (エ) *marginalization*: (h) the exclusion of groups from full participation in society
- (オ) *emancipation*: (g) being freed from control, restrictions, or unfair limits
- (カ) *normative*: (c) establishing norms, standards, or rules (often in legal or policy contexts)

問2 下線部①を含む段落を見て、言及されている「自然的要因」と「社会的要因」をそれぞれ答えなさい。

自然的要因: The Covid-19 pandemic

社会的要因: Linguistic imperialism

問3 下線部②を日本語に訳しなさい。冒頭の *In the process* が指す内容を明示して訳すこと。

主導的な言語が威信を獲得する主な要因は、それらが経済的プロセスや富の創出と密接に関連している点にある。その過程において、地域言語や少数言語は周縁化され、社会的地位のみならず話者をも失う可能性がある。「*In the process*」とは、支配的な言語が権威を獲得することを意味する。

問4 本文の内容を踏まえて、多言語主義とは何か、またそれが言語の消滅をどのように抑えるのかについて、自分の言葉で説明しなさい。

多言語主義とは、特定の社会文化的・政治的文脈における知識の創造、共有、評価において、支配的な言語を優先するのではなく、多様な言語の使用を奨励することです。この意味で、多言語主義は民主主義と平和な社会の維持に不可欠です。

問5 現在のデジタル技術のあり方や、インターネットがどのように構築・利用されているかによって、言語的不平等がどのように悪化しているのかについて、筆者の主張を自分の言葉で要約しなさい。

インターネット上の情報は、主に英語をはじめとする主要言語によって伝達されています。現在約 8,000 言語のうち、約 98% はインターネット上でほとんど、あるいは全く利用されていません。これは、かつての植民地主義的価値観やプロセスを反映した、ある種のデジタル疎外を生み出し

ています。したがって、インターネットが世界の真の言語的複雑さを反映することを保証するだけでなく、疎外された言語コミュニティがそのような情報にアクセスしやすくするためにも、さらなる努力を払う必要がある。

問6 2003 年の UNESCO Recommendation Concerning the Promotion and Use of Multilingualism and Access to Cyberspace の内容と目的について、自分の言葉で要約しなさい。

本文の核心となる主張は、特定の言語の支配が代替的な視点の封じ込めにつながり、ひいては認識論的、社会的、そして経済的格差の拡大につながる可能性があるというものです。この継続的な問題は、(a) 社会生活のあらゆる側面におけるインターネットの重要性の高まり、そして (b) インターネットが支配的言語を明確に優先していることによって、さらに悪化しています。2003 年の UNESCO Recommendation は、デジタルを介したコミュニケーションの影響の拡大と世界中で生成型 AI が広く使用されていることを考慮して、表現の自由と言語差別の問題について以前の文書よりもさらに具体的に規定している。

※出題意図と入学者受入方針 アドミSSION・ポリシー との関わり

文学研究科のウェブサイト (<https://www.hgu.jp/about/letters-graduate-school.html>) に記載されている通り、

「複雑化した現代社会では、文学研究科では、北の大地を豊かな教育・研究の場として新しい人文学を創成し、世界へ発信することを目指しています。また、地域及び国際社会において、明日の教育を担いうる優れた人材の養成も使命としています。伝統的な思考では対処・解決できないような様々な問題が発生し、その対応には専門的な知識と視点が必要とされています。」

したがって、本試験は、英語の学術論文に対する読解力を問うのみならず、受験者が自身の学習経験をより広範な社会生活における言語のあり方へと結びつけ、再考することを促すよう設計されています。特に、世界的な言語的多様性への脅威と、その保護に向けた政策的取り組みに焦点を当てており、受験者が単なる「言語学習者」の視点を超え、言語的不平等を生み出す根底的な生成メカニズムを洞察することを求めています。設問を通じて、具体的な現象と抽象的な概念を往来する能力（学術研究の要諦）を評価し、言語的多様性や不平等といった複雑な社会的事象を説明できる力を問うことを意図しています。